
鮮血の魔王様

アベレージ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

鮮血の魔王様

【Nコード】

N9350X

【作者名】

アベレージ

【あらすじ】

彼の王は踊る。

まるで愚者のように。

まるで道化のように。

その身を鮮血に染めて。

一話（前書き）

またもや見切り発車。

構想時間約三時間、突貫作業です。内容には期待しないでください。

一話

この世界は端的に言うとか向かい合わせの鏡のようなものなのだと、魔界史上最大の頭脳を誇る魔科学者墮部印痴ダヴィンチは言う。

ここで言う世界とは、言わずもがな魔界、天界、地界のことであり、彼の偉大なる魔科学者が表現したように、この三世界は地界を間に挟み魔界と天界が向かい合うように存在していた。

地界は別名で現世うつしよと呼ばれ、そこに住むものはすべてからく肉の体を持つており、またそうでなければ現世には存在できない。

逆に魔界や天界は幽世と呼ばれ、そこに存在するものは肉の体を持たず、すべてからくオドとよばれる魔力素によって保っていた。故に、魔界に住む魔人と天界に住む天人という幽世の住人は基本的に地界に干渉することはなかった。

しかし、互いに幽世の住人である魔人と天人は違う。

彼らはまるでそれが宿命であるかのように互いに憎み合った。

主義主張、価値観の違い、それもある。だがそもそも魔人と天人ではその存在の役割が違いすぎたのだ。

天界は魂の循環を司り、魔界は生の破壊を司る。

それは存在の根元に関わるもの。

正反対の役割を持つ彼等が互いに憎み合うのもまた自然の摂理だった。

そう、それはまるで鏡の向こう側に映る己を嫌悪するかのように。彼等は彼等を初めて認識したその時から悠久の時間を戦い続けた。

互いに殺し殺され、幾星霜もの間憎しみだけを積み上げて。

しかしその殺し合いが終わることはない。

進化と創造を司る地界とは違い、魔界と天界、ひいては魔人と天人の存在の総量は常に一定、決して減ることも増えることもない。

当然死という概念は両者共に存在してはいる。

が、そのような理由から幸か不幸か、彼等が殺し殺された果てに滅びることはなかった。

だが、この世の理に永遠などというものがないように、永久に続くかと思われたその歴史にも終止符が打たれることになる。

今尚天界最強の座を頂く異端の天人、『天神アスヴェル』。

そして魔界に君臨する百八柱の魔神の頂点にして八柱の王が一、『
ついま
堕魔クリスベル』。

この二体の神の下、地界を中心に魔界と天界を別つための大規模な術理が編まれた。

後に【天魔事変】と呼ばれるそれにより、魔界と天界は今までのように自由にお互いの世界に干渉することができなくなり、その結果として悠久と続いた殺し合いの歴史は幕を下ろした。

こうして魔界と天界は穏やかな時代を迎え、三世界に新たな秩序が生まれたのだった。

――そして、時は流れる。

二話

魔界と天界が別たれた【天魔事変】よりおよそ五千年後。

場所は魔界。

バケツ一杯の血をぶちまけたような濁った赤い空に見下ろされ。
コールタールのように光を映さない見るも不快な黒い魔海に囲まれるようにその島は存在した。

【アグナ・ベール終憶の死島】。

———五千年前。かつて二つの世界を分断した【天魔事変】にて全ての魔人を裏切り、忌々しき天人と手を組んだために魔界中の怒りと共に首を狙われ、しかしそれでもなおそれらの悉くを返り討ちにした『堕魔クリスベル』。

墜ちた魔と誹りを受けようとその力だけは本物であり、やがて誰もが彼の魔王に手を出す無謀を悟り、挑むものはいなくなった。

そして、それから数百年後。

その魔王直々に後継者としてとある魔人が選ばれたことで、再び魔界は荒れた。

魔界の住人達は誰もが驚嘆したのだ。

それもそのはず、魔王とは魔界で至高の力を持った八人に与えられる称号であり、魔王が変わるということは更なる力をもったものに敗れるということ。つまり死をもって代々の魔王はその座を手に入

れてきたのだ。

それがあるうことか戦うことすらなく魔王が後継者を逆指名するなど、力を信奉する彼等魔人にとっては信じがたいことであり。

しかも選ばれたのは、まったくの無名の魔人。

魔人として生まれたならば誰もが夢見る魔王の名を、誰とも知れない存在に横取りされたのだ。

彼らは当然のように憤った。

『所詮は墜ちた魔王、魔王の称号すら汚す愚か者なり』と。

かつてその『愚か者』に大敗したことすら忘れ去り、数々の魔人が魔王の座を求め、新たな王の棲み家である孤島へと大挙し。

——そして、そのことごとくが二度と島の外へ踏み出すことはなかった。

新たな魔王は『死神王』と呼ばれ、死神王の棲み家は畏れと恐怖を持って【終憶^{アグナ・ベール}の死島】と呼ばれた。



時は戻る。

そのような経緯を持って、今では誰もが畏れと共にその名を口にするその島の中央。

島のほぼ全域がジャングルを彷彿とさせる密林地帯であるにもかかわらず、そこには不自然なほどにぽっかりとくり抜いたように穴があいており、その開けた場所に建っているそれこそが『死神王』と

恐れられた魔王の居城。

築千年以上二階建てのおよそ百四十坪。

訪れた者全てを「あっ」と驚かせるような、それはそれは見事な魔界印のログハウスがそこに存在していた。

長い年月をかけて大量に空気中のマナを取りこみ、頑丈に育った魔樹と、島の南東部に存在する魔火山で採取した、純度の高い天然の魔鋼を用い、さらに複数の魔法を重ね掛けして創られたこのログハウスはまさしく、魔王の居城と呼ぶにふさわしい鉄壁の耐用年数を誇っている。

————その魔王の居城の二階。最奥に位置する場所にこの城の主、死神王の執務室が存在する。

部屋の造りは実に質素。大きな筆筒が一つ、机と椅子が一组、あとはシングルサイズのベッドが一つだけ。

そんな質素な部屋の奥に鎮座するベッドの上、威風堂々と正座させられている男こそ我が死神王、その人である。



死神王、またの名をやマダ・キョースケ。

背丈は百七十四センチの痩せ型。

墨汁を垂らしたよう黒髪はざつくばらんに短く切りそろえ。

魔人としては珍しく赤色ではなくコバルトブルーの瞳。

涼しそうな黒色のTシャツと短パン。

眠たげに細めた瞳は彼が未だ目覚めたばかりだからだろうか？

あるいは、寝起きを邪魔された怒りによるものだろうか？

『ごぼり』と。

ヤマダは喉の奥に溜まった血を顔を横に背けて吐き出す。

大量に吐き出されたそれがベッドの上に赤い染みを作った。

妙な気だるさを感じる体を起こし、白かったはずのベッドシートが真っ赤に染まっているのを確認してくら、いつのまにかベッドサイドに立つ女に視線を向ける。

「……なあ、狂理^{クリ}、前も言ったと思うけどもう少し穏便に起こしちゃくれないだろうか？」

狂理と呼ばれた女は、その言葉に嬉しそうな笑顔を浮かべる。

「くふふ、だってキョースケがあまりにも無防備だったんですからしょうがないじゃないですかー」

そう言って、右手に持った、明らかにホッケーマスク被った怪人の愛用するチェから始まってソーで終わるアレにしか見えない、すでに使用済みな感じで血に濡れた凶器を自分の後ろに放り投げる。

背後の魔法空間に消え行くそれを何気なく目で追ったヤマダは再び女へ目を向ける。

名前は狂理^{くり}（偽名）。腰まで伸びる灰色の髪と赤い瞳。

その背丈は魔人の平均身長より低めの百五十八センチ。ひざ丈のス

カートと黒いシャツの上から白衣のような丈の長いコート羽織っており、シャツを内側から押し上げる狂乳の眺めはまさに狂っている一言。

肉感に溢れた紛うことなき絶世の美女を体現しているだけに、その魔海のように淀んだ瞳が無ければと思わずにはいられない。

「マッキー（魔装機械の略）百二十七号は失敗ですかねえ。出力が不安定です。キョースケごときの紙防御を抜けないなんて。一回しか殺せませんでしたよ」

「うおい、人が寝てる間になんてことしてんだ！ おまえあれだ、一から命の重みについて語ってあげましょうか？」

「くふふ。キョースケが命を語るんですか？ ふふふ、面白い冗句ですね？」

「てんめえ、調子に乗ってるとその乳揉み『グシャ』」

狂理の無造作にはなったビンタがヤマダの頭をトマトのように弾く。

「いや、狂理、くしゃみするかのように簡単に人さまの命摘んだらだめでしょって『パン』」

言葉の途中で繰り出されたデコピンで風船のように頭が割れる。

鮮血で彩られたベッドを前に狂理はとても愉しそうな笑みを浮かべ。

「くふふ、キョースケ、先週街に出かけた時、サキュバスと遊んだでしょう？」

見下ろすようにして、顔を青ざめさせるヤマダに笑いかける。

「実に興味深いですね？」

——それはそれは、とても威風堂々たる土下座だったとい
う。

二話（後書き）

取り敢えずはここまで。

まあ、息拔きのつもりで書いただけなので

だから続きを書くかは分からない。一応主人公の設定とか考えたけどお蔵入りになりそうですねえ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9350x/>

鮮血の魔王様

2011年10月26日02時06分発行